

聖書：使徒 28：16～31
説教題：妨げられることなく
日時：2014年11月2日

使徒の働きの最終回となりました。前回の箇所パウロはついにローマに到着しました。そのローマでの様子がここに記されています。パウロは番兵付きで自分だけの家に住むことが許されました。鉄格子の向こうの暗い牢屋ではなく、普通の家に住むことが許されました。これはパウロが罪ありとは認められて来なかったこと、ローマ市民であったことに加えて、何より百人隊長に認められて来た人であったということが大きかったでしょう。

パウロは3日後にローマに住むおもだったユダヤ人たちを呼び集めます。新しい土地ではまずユダヤ人に語るというあり方はこれまでと同じです。パウロは彼らにこれまでの経緯を17節以降で説明します。私は私の国民に対しても、先祖の慣習に対しても、何一つそむくことはしていないこと、なのにエルサレムで囚人としてローマ人の手に渡されたこと、ローマ人は私を釈放しようとしたがユダヤ人たちの反対によってやむなくカイザルに上訴したこと、しかしそれはユダヤ人を訴えようとしたものでは決してないこと、自分はイスラエルの望みのためにこうして鎖につながれていること、などです。

これに対するユダヤ人たちの21節以降の答えは一見意外なものです。彼らはパウロについてユダヤから何の知らせも受けていないと言います。またローマに来たユダヤ人中であなたについて悪いことを言う者もないと言います。これは彼らの耳に何も届いていなかったということではないと思います。ただそれはユダヤからの正式な連絡ではなかった。そこで彼らはパウロから直接、自分たちの耳で彼の主張を聞きたいと思ったのです。そのためには前もって色のついたことは言わないようにしたのでしょう。しかしこの宗派については至る所で非難があることを知っています、とは述べます。他の地域では、世界中を騒がせて来たとまで評されたパウロ。何らかのゴタゴタが各地で発生しているようだということは聞いていたのです。

そこで日を改めてパウロから話を聞いた時の様子が23節以降に記されています。ユダヤ人たちは大勢でパウロの宿にやって来ました。パウロは朝から晩まで彼らに語り続けました。その内容は神の国のこと、そしてイエスのことでした。これを聞いたユダヤ人たちの反応が24節にあります。「ある人々は彼の語る事を信じたが、ある人々は信じようとしなかった。」続く節を読むと、おそらくパウロに反対する人たちの方がはるかに多かったでしょう。

その彼らにパウロは「聖霊が預言者イザヤを通してあなたがたの父祖たちに語られたことは、まさにそのとおりでした。」と言って、イザヤの言葉を引用します。26～27節は

イザヤが主からの召命を受けた時に、主から言われた言葉です。彼は預言者として召されましたが、イスラエルの民の好意ある応答を期待してはならないと言われました。むしろ彼らはあなたのメッセージを拒絶する、と。まさにその通りのことがあなたがたに成就した！とパウロは言います。それゆえ、この神の救いは異邦人に提供される、と 28 節で言います。28 節：「ですから、承知しておいてください。神のこの救いは、異邦人たちに送られました。彼らは、耳を傾けるでしょう。」

パウロは新しい地では最初にユダヤ人に福音を語りましたが、彼らの拒絶によって福音は異邦人に差し向けられるというパターンがこれまでも繰り返されて来ました。13 章 46 節：「神のことは、まずあなたがたに語られなければならなかったのです。しかし、あなたがたはそれを拒んで、自分自身を永遠のいのちにふさわしくない者と決めたのです。見なさい。私たちは、これからは異邦人のほうへ向かいます。」 18 章 6 節：「あなたがたの血は、あなたがたの頭上にふりかけられ。私には責任がない。今から私は異邦人の方に行く。」 そのことはこのローマでも起こったのです。福音はこうしてこのローマまで、そこに住む異邦人にまで伝えられて来たのです。

パウロのここでのユダヤ人に対する、イザヤ書を引用しての言葉は厳しいものですが、これは決して腹いせに語られた言葉ではありませんし、またユダヤ人にはもう救いは与えられないということではありません。ローマ書 11 章 11 節から分かることは、こうして福音が異邦人に差し向けられ、異邦人がどんどん救いにあずかる現象の背後には、イスラエルにねたみを起こさせるという主の目的があるということです。そうして彼らが主を求め、救われる者がそこから起こされるためということです。パウロはローマ書 11 章 13～14 節で、自分は異邦人への使徒だから異邦人に伝道するという自分の務めを重んじているが、それは「それによって何とか私の同国人にねたみを引き起こさせて、その中の幾人でも救おうと願っているのです。」と述べています。すなわちパウロはただムカムカと来て、彼らに旧約の言葉をぶつけたのではなく、なおその心には同胞イスラエルへの愛を持っていたということです。彼らの救いを心から願っていた。しかしユダヤ人たちはこのイザヤ書の警告に真剣に聞かなければなりません。差し出されている福音を受け入れず、これを軽んじるなら、その心は益々頑なになる。真理が益々分からない者になる。それは神のさばきです。だから目をつぶり、耳を閉じ、絶対に福音に聞かないぞ～という態度を取って、癒されることがない者になることがないように。その反対の祝福の道こそを進むようにしなければならないのです。

異邦人である私たちにとって、ここはどんな意味を持つでしょう。何と言ってもこれは大きな恵みを私たちにとっては意味します。神の救いはこうして私たちにも提供されることになりました。福音に接することができる枠は私たちにも広げられることとなり

ました。この神の御心によって、この日本まで福音は届けられるに至りました。私たちは今こうして聖書を手にし、神の救いにあずかるように招かれていることを大いに感謝しなくてはなりません。と同時に私たちもここにある警告を聞かなくてはならないと思います。もし私たちがこの福音を退けるなら、それは他の人に差し向けられる。そして私たちはこれを失います。せつかく目の前に差し出されているのに、これを拒絶することにより、自分で自分を決して癒されることがない者という運命に押しやってしまう。ですから私たちは今このように福音を聞く恵みにあずかせていただいているという神の摂理を感謝して、28節で「彼らは耳を傾けるでしょう」と言われている通りに福音に耳を傾け、これに熱心に応答し、神の国と主イエスの祝福にあずかる者とさせられたいと思います。

最後 30～31 節は使徒の働き結びです。たったの 2 節で、随分あっけない終わり方だと感じる方も多いかもかもしれません。私たちは色々知りたいと思います。この後、パウロはどうなったのか。囚人の状態から解放されたのか。カイザルの前で裁判を受けたのか。もし釈放されたら、その後はどんな活動をしたのか。また地上の生涯をどのように全うしたのか。しかし使徒の働きはパウロについての伝記ではありません。あくまで著者ルカの目的は天に上られた主が聖霊を通してなさっているみわざの最初の部分を記すことです。ルカはその目的を十分に果たし、そのまとめとして、この二つの節を書いたのです。ここに記されていることは何でしょうか。それはパウロは鎖につながれた状態にありながら、なお神の国と主イエス・キリストのことを宣べ伝え続けたということです。そして日本語ではスムーズに訳そうとして、それが見えませんが、原文では最後に「大胆に、少しも妨げられることなく」という言葉が来ています。そして特に一番最後の言葉は「妨げられることなく」という言葉です。これは使徒の働き結びの言葉として特別の意味を持つ言葉でしょう。ルカはこの一語を使徒の働きの最後に置いたのです。すなわちこの書を読み終えるにあたって、この言葉を最後に心に響かせることが大切であるということです。

「妨げられることなく」。主は 1 章 8 節で「聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」と言われました。そしてこの使徒の働きではエルサレムからローマまで福音が前進したことを私たちは見て来ました。福音は今や当時の世界帝国の中心地まで来ました！そしてなおそこで大胆に宣べ伝えられています！しかしある人は、「妨げられることなく」などと言えるだろうか、と思うかもしれません。むしろたくさんの方々がこの書に満ちていたのではないかと。多くの迫害、危険、困難、誤解、陰謀の連続だったのではないかと。つい最近見て来たところでも、地中海の嵐があ

り、難船があり、上陸したところでのマムシ事件があり、ローマに着いてもユダヤ人たちが反対しました。しかしより大きな目を持って見れば、確かに福音は世界の中心地ローマまで進んで来ました。多くの妨げがあったでしょうが、それらをもものともせず、みな突破して進んで来ました。これはまさに「妨げられることなく」と言い表して良いことではないでしょうか。確かに様々な妨げに妨げられないでここまで来たのではないのでしょうか。ルカはこうして使徒の働きを書き終えるにあたり、「福音の勝利」を高らかに歌っているのです。Ⅱテモテ2章9節：「私は、福音のために、苦しみを受け、犯罪者のようにつながれています。しかし、神のことばは、つながれてはいません。」

そしてこれは単にこの書の内容を言い表しただけのものではなかったでしょう。ルカが言いたいことは、福音はこれまで妨げられることなく進んで来たように、これからも同様に妨げられない！ということだったでしょう。復活の主が示された宣教の青写真は、まだ最終地点に達していません。主は1章8節で「地の果てにまで」と言われましたが、このローマは地の果てではありません。ここは世界の中心地です。確かにここまで到達したことは一つの重要な段階を越えたということ意味します。しかしここからさらに、地の果てまで福音は伝えられなければなりません。ですから私たちがこの使徒の働きの結びを読んで未完結のように感じるのは当然なのです。なぜなら話はまだ終わっていないからです。完全に結びの言葉を書けるのは、主の御国の完成の日です。それまでの間、この使徒の働きの続きを書いて行くのは私たち一人一人なのです。この続きは一体どうなったのか？と他人事のように尋ねるのではなく、この続きは私たちが自分の生活をもって書いていくべきことなのです。

その際に大事なのが、この書の一番最後の言葉、「妨げられることなく」という言葉をしっかり胸に刻むことではないでしょうか。福音を伝える働きには多くの困難や妨げがあるでしょう。この使徒の働きにもそのような記事が満ちていました。今見ている一番最後の記事でも、パウロは鎖につながれています。ここに改めて苦しまずして福音宣教ができると思ってはならないということを教えられます。気楽に、ただ楽しく宣教ができるということはないのです。宣教と苦しみはセットです。しかしそこで私たちが心に留めておくべきは、この書最後の「妨げられることなく」という言葉です。どんな妨げがあっても、福音は妨げられることなく前進していく。この「福音の勝利」を信じて自分の務めに当たるように、そしてこの使徒の働きの続編を今度はあなたが書いて行くように！とルカは語っているのではないのでしょうか。

私たちはいつまでこの務めに当たるのでしょうか。使徒の働きの最初に見た1章11節の言葉を最後にもう一度心に留めたいと思います。「ガリラヤの人たち。なぜ天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って

行かれるのをあなたがたが見たときと同じ有様で、またおいでになります。」 ポカンと天を見上げていた弟子たちに対して御使いは、目標を見失ってただここに突っ立っているのはダメだよ！と言ったのです。主は再び来られる。その栄光の日を待ち望んで、その日まで主に与えられた使命に励むように、と語ったのです。私たちもこの主の再臨の日、神の国の完成の日に向かって、主に与えられた宣教の使命に励む者とならせていただきたく思います。この使徒の働きを読んで来た者として、今や天に上られた勝利の主が私たちと共にいて下さることを見上げつつ、主が聖霊を私たちに遣わして下さっていることを感謝しつつ、「妨げられることなく」という言葉がこれからも真実であることを信じつつ、そして使徒の働きを今度は私たち一人一人が書き綴って行くのだという光栄を覚えつつ。